

# 知的世界を広げるブック・リストの作成

—今月のベスト10, 読書推薦文の授業実践を通して—

国語科 島村潤一郎

今、従来の知識注入型一律教育から、自ら課題を見つけ、自ら主体的に学ぶ資質・能力の育成といった方向への、大きなパラダイムの転換が求められている。また平成14年度からは本格的に学校週五日制も始まる。そうした中、高校の現場では「教材の精選」が叫ばれている。現実問題として、実際に「現代文」の授業時間数もここ何年かで急減し、とり扱える教材数も限られるようになってきた。そうした中で従来の学力を維持させていくのは至難の技である。そうした隘路を打開する方法の一つとして、最近、私が特に力を傾けているのが読書教育である。「今月のベストテン」と称して、平成七年度よりここ何年間にわたって、本校の二年生対象に読書案内を行ってきたが、本文はその記録である。

キーワード：国語 読書教育 図書 図書教材 図書館教育

高校時代から何とはなしに思い続けてきたことがあった。それは、国語、とりわけ現代文の基本は畢竟「読書」に尽きるのではないか、ということであった。漢字、語彙力、読解力、文章力、いずれも普段から本を読んでさえいれば、こうしたものはかなり自然と身についていくのではないか。この考え方は高校の国語教師となった今でもそう大きく変わるものではない。むしろそういう思いは逆に強まった。また別の意味でも、十代後半から二十代前半にかけての読書生活というのは、非常に重要である。それによってその人の知的世界の広がりやほぼ決定づけられてしまう。以上の二点が、高校生対象の読書指導へと、私を強く向かわしめることとなった。

一時「折々の歌」と称して、一年間毎週、春夏秋冬、その時節に応じた様々な詩歌を紹介するという試みをしたことがある。今週はどのような作品を用意していこうか、と考えあぐねるのが結構楽しかった。そうした応用が他にできないだろうか、ということでも生まれたのが「今月のベスト10」という企画だった。4月だったら「比較文化論」、5月だったら「青春小説」、その他その月々それぞれ、「ミステリー」、「歴史」という具合にテーマを決めて、毎月

10冊ずつ良書を紹介していこうというコーナーを授業の中に設けてみた。これで一年間にトータルとして100冊近くの本を紹介できることになる。

しかし、ただ書名を紹介するだけでは味気ない。ということで当然のこととして、一冊一冊、簡単なコメントを加えていったが、更に具体的にどのような本であるか知ってもらうために、毎月一冊を特にとりあげ、さわりの部分、ハイライトの部分を読んで聞かせるという試みも行ってみた。近頃、ブックトークというものが教育現場で流行っていると聞くが、それに準ずるものである。(平成十年度に金沢で開かれた全国図書館大会で、このブックトークを間近で見る機会があったが、極めて上質の話芸を見る思いで、強く心を動かされた。自分のはまだそうした名人芸の域に遠く及ばないので、「準ずるもの」と言わせていただく。) リストの中で☆印がついているものがあるが、それはそういう読み聞かせを行ったというものである。

毎年二年生を対象に、本校に赴任した平成七年度から本年度まで(二年生の授業を持たなかった八年度は除いて)六年間、このような試みを行ってきたが、その間、様々な試行錯誤などにより、この企画

も少しずつ形態を変えてきた。そういった点を以下に述べてみたい。

まず一番強調しておきたいことは次の二点である。第一点。ただ書名を紹介するだけでは駄目。多少面倒に思われても、実際にその本を教室にまで持ってゆき、こういう本だよとじかに見せないと生徒の興味を惹きつけることはできない。第二点。本は生徒が実際に手にとってみることでできる場所に置かないと意味がない。振り返ってみるに、最初の二年間は我ながら無意味なことをしていたものと非常に後悔する部分が少なくない。ただ書名を紹介するだけで、読みたい生徒は私のところまで借りに来るようにという形で済ませていたのである。確かに本好きで積極的な一握りの生徒はわざわざ国語教官室まで足を運ぶが、その絶対数はまだ圧倒的に少なかった。図書室にコーナーを作って家から持ってきた本を置かせてもらうということを思いついたのは、平成十年度の六月のことである。このあたりからこのコーナーを利用する生徒がぼつぼつと現れ始めた。利用者が飛躍的に増えたのは平成十一年度からである。この年、朝の十分間読書が始まったからである。それでも私はまだ少し物足りなさを感じていた。どのテーマにしる、十冊に絞ってしまうのはかなり難しいのである。どうしてもこぼれおちてしまう本が出てくる。そういった本もどんどん生徒の前に提示していきたいとかねがねから私は思っていた。平成十二年度自分の担任する学年がちょうど二年生になったこともあり、それでその計画を実施してみることにした。学級文庫の設置である。思えば小学校の頃、学級文庫というものがあった。学年が上に上がるにつれ、いつの間にやら見られなくなってしまったが、高校であれをやってみたら面白いのではないかと思ったのである。知的好奇心に満ち充ちた年頃であるし、何よりもこの年頃の若者というのは、友人たちがどんな本を読んでいるかを意識し、いい意味での競争意識を燃やし、切磋琢磨しあいながら、読書の幅を

広げていくものである。クラスメイトどうし、いい刺激を与えあうことにつながるし、また本をめぐるネットワーク作りにつながるのではないかとも思って始めてみた。ただしこのやり方に問題点がないわけではない。いちばん大きな悩みの種はこれである。そう、自分の本が返ってこないことがあるのである。

さて、十二年度からはまた別の試みも始めてみた。自分にも経験があるからよくわかるのだが、一度鉾脈にぶつかると、芋づる式に次々と面白い本と出会えるということがある。読書生活においては、一つの本からまた別の本へと次々とつながっていくこのような広がりもまた大切である。一冊の本を読み終えてそこで終わるのではなく、そこを足がかりとして様々な方向へどれだけ知的世界を広げていくことができるか、これもまた良書（良い教材）の条件だと考える。一冊の本は到達点ではない。通過点であり、分岐点である。ということで、本の最後のページに「この本を面白いと思った人は→『 』へ。」という書きこみをした付箋を貼ることにした。自分の興味関心にしたがって新たな本に向かえるように、発展学習の参考となる資料をつけることを心がけた。簡単に言えば、読書生活の道標作りである。

次にブックリストを作成していく上で留意した点を述べておく。それは「多様性」ということである。多様な個性を持つ生徒が興味を持つことができるように、できるだけ間口を広くとり、谷崎潤一郎から大槻ケンヂまで、和辻哲郎から中島らもまで、漫画から大脳生理学の本、天才数学者の評伝まで、多岐にわたる本をリストにとりこむこととした。ややもすると国語教師の作るブックリストというのは、教養主義的になりがちで、漱石、龍之介、太宰などといった純文学の古典的作品ばかりに強く偏りがちである。えてして国語教師というのは、こういう文芸的作品をヒエラルキーの上位に置き、その他の諸作品を拾い上げようとしない傾向にある。文芸的古典作品の価値を否定するつもりは毛頭ない。しかし念

頭に置いておかねばならないのは、そうした作品に興味を持てる生徒もいれば、そうでない者もいるということである。そうした教師の薦める教養主義的な作品を「面白い」と思えなかったが故に、自分には読書への「適性」がないと思いき、読書から遠ざかっていくことになってしまったという生徒がかなりいるのではなからうか。興味のない生徒に読みたくもない本を押しつけても逆効果であろう。本というのは小難しく退屈なものだという先入観を植えつけてしまい、本嫌いを作るだけという危険性がある。私ごとではあるが、何を隠そう、私は課題図書というやつが嫌いだった。読書とは極めて個人的な楽しみのはずである。それなのにどうして強制されてまでみんなと同一の本を読まねばならないのか。面白いと思わなかった本の感想文をどうして書かねばならないのか。どうせなら自分の読みたい本を読んで、その本への思いを語りたい。興味、関心、趣味、嗜好、意欲、得意不得意……これらの個性は十人いれば十人それぞれ、まさに十人十色である。全員に一律同じ本を押しつけるのは、流感の患者もいれば、高血圧、糖尿病、食中毒……と様々な症状の患者がいるにもかかわらず、診療もせずにそれらに全く同一の薬を処方するのと同じナンセンスではなからうか。「一律化から個性の尊重へ」というテーゼが教育現場で聞かれるようになって随分と久しい。今、必要とされているのは、生徒それぞれの個性に応じた本を、水先案内人である教師が彼らの前に少しずつ提示していくことなのではなからうか。

さて、以下がこの一年間生徒諸君に提示し続けてきた一連の本のリストである。

平成十二年度、今月のベスト10

#### 四月 青春小説・恋愛小説

- ①「それから」 夏目漱石（新潮文庫）
- ②「春琴抄」 谷崎潤一郎（新潮文庫）
- ③「草の花」 福永武彦（新潮文庫）
- ④「青春の蹉跎」 石川達三（新潮文庫）
- ⑤「女生徒」 太宰 治（角川文庫）
- ⑥「ストロベリー・ロード」  
石川 好（文春文庫）
- ⑦「赤頭巾ちゃん気をつけて」  
庄司 薫（中公文庫）
- ⑧「蝶々の纏足」 山田詠美（河出文庫）
- ⑨「フラニーとゾーイー」☆  
J・D・サリンジャー（新潮文庫）
- ⑩「グミ・チョコレート・パイン」  
大槻ケンヂ（角川文庫）

- ①夏目漱石が描く三角関係の世界に興味を覚えたら  
→「こころ」へ。
- ⑤太宰治の明るい作品をさらに読みたいという人は  
→「斜陽」へ。暗い作品を読みたいという人は  
→「人間失格」へ。
- ⑨サリンジャーの他の作品を読みたいと思った  
人は→「ライ麦畑でつかまえて」へ。
- ⑩大槻ケンヂのエッセイも読みたいと思った人  
は→「のほほん雑記帳」へ。

#### 五月 短編集

- ⑪「受け月」 伊集院静（文春文庫）
- ⑫「月のしずく」 浅田次郎（文藝春秋）
- ⑬「無明の蝶」 出久根達郎（講談社文庫）
- ⑭「豊臣家の人々」 司馬遼太郎（文春文庫）
- ⑮「鳩笛草」 宮部みゆき（カッパノベルス）
- ⑯「久生十蘭全集Ⅱ」 （三一書房）
- ⑰「幻想博物館」 中井英夫（講談社文庫）

- ⑮「人体模型の夜」 中島らも（集英社文庫）
- ⑯「怪しい来客簿」 色川武大（文春文庫）
- ⑰「清水義範の愛好本」☆ 清水義範（講談社）
- ⑱浅田次郎の他の作品を読みたいと思った人は→「鉄道員」へ。
- ⑲古本屋の世界に興味を持った人は→「本のお口よごしですが」へ。
- ⑳ここに描かれている時代に興味を持った人は→「関ヶ原」,「城塞」へ。
- ㉑宮部みゆきの他の短編集も読みたいと思った人は→「我らが隣人の犯罪」,「地下街の雨」へ。
- ㉒「燔祭」の主人公のその後をさらに読みたいと思った人は→「クロスファイア」へ。
- ㉓宮部みゆきの長編も読みたいと思った人は→「火車」へ
- ㉔美しい日本語で書かれた幻想小説をさらに読みたいと思った人は→泉鏡花「高野聖」, 江戸川乱歩「押し絵と旅する男」へ。
- ㉕「幻想博物館」のラストにうーむと唸った人は→半村良「夢の底から来た男」へ。
- ㉖中井英夫の作品をさらに読みたいと思った人は→「虚無への供物」,「悪夢の骨髄」,「幻戯」へ。
- ㉗色川武大の他の作品も読みたいと思った人は→「狂人日記」へ。
- ㉘「蕎麦ときしめん」が面白いと思った人は→「金鯪の夢」へ。
- ㉙「東京ジャンキー」  
ロバート・A・ホワイトティング（朝日新聞社）
- ㉚「本のお口よごしですが」  
出久根達郎（講談社文庫）
- ㉛「うらおもて人生録」☆ 色川武大（新潮文庫）
- ㉜「だまされたらアカン」 青木裕二（講談社）
- ㉝「言葉への旅」 森本哲郎（角川文庫）
- ㉞鴻上尚史のエッセイをさらに読みたいと思った人は→「鴻上夕日堂の逆上」,「鴻上の知恵」へ。
- ㉟鴻上尚史の戯曲をさらに読みたいと思った人は→「朝日のような夕日をつれて」へ。
- ㊱文章でちゃんと笑わせるというのも立派な芸だなぁと思った人は→中島らも「らも嘶」へ。
- ㊲中島らもの小説も読みたいと思った人は→「ガダラの豚」,「今夜、すべてのバーで」へ。
- ㊳酒、食、旅について書かれた文章が特に美味しいと思った人は→「地球はグラスのふちをまわる」へ。
- ㊴開高健のエッセンスを味わいたいと思った人は→「舞台のない台詞」へ。
- ㊵釣りが好きだというアウトドア派の人は→「オーパ」へ。
- ㊶開高健の小説も読みたいと思った人は→「夏の闇」へ。
- ㊷野球が好きな人、比較文化論に興味のある人は→「和をもって日本となす」へ。
- ㊸さらに古本屋の世界に興味を覚えたという人は→「古書彷徨」へ。

## 六月 エッセイ

- ㉑「ドン・キホーテのピアス」  
鴻上尚史（扶桑社）
- ㉒「とほほのほ」 中島らも（双葉文庫）
- ㉓「白いページ」 開高 健（角川文庫）
- ㉔「だから私は嫌われる」  
ビートたけし（新潮社）
- ㉕「ラッパー一本玉手箱」 近藤等則（朝日新聞社）

## 七月 旅先で読む本

- ㉑「ワイルド・スワン」（中国）  
ユン・チアン（講談社文庫）
- ㉒「高丘親王航海記」（東南アジア）  
澁澤龍彦（文芸春秋）
- ㉓「太平洋の世紀」（東アジア）

F・ギブニー (TBSブリタニカ)

- ③④「海外路上観察学」(アジア)  
下川裕治 (双葉社)
- ③⑤「どくろ杯」「ねむれ巴里」「西ひがし」  
金子光晴 (中公文庫)
- ③⑥「斜影はるかな国」(スペイン)  
逢坂 剛 (講談社文庫)
- ③⑦「世界の歴史12ルネサンス」(イタリア)  
会田雄次 (河出書房新社)
- ③⑧「もっと広く」(ラテン・アメリカ)  
開高 健 (文春文庫)
- ③⑨「ガダラの豚」(アフリカ)  
中島らも (実業之日本社)
- ④⑩「パパラギ」(どこか南の島で) ☆  
(立風書房)
- ④⑪毛沢東、文化大革命に興味を持った人は→「毛沢東の私生活」へ。
- ④⑫革命の理想が次第に裏切られていくプロセスに興味を持った人は→ジョージ・オーウェル「動物農場」へ。
- ④⑬澁澤龍彦の紀行文も読んでみたいと思った人は→「ヨーロッパの乳房」へ。
- ④⑭澁澤龍彦の短編集をさらに読んでみたいと思った人は→「唐草物語」へ。
- ④⑮金子光晴の詩も読んでみたいと思った人は→「金子光晴詩集」へ。
- ④⑯金子光晴の紀行文をさらに読んでみたいと思った人は→「マレー蘭印紀行」へ
- ④⑰貧乏旅行に興味を持った人は→沢木耕太郎「深夜特急」、下川裕治「アジア赤貧紀行」,「12万円で世界を歩く」へ。
- ④⑱逢坂剛のスペインものをさらに読んでみたいと思った人は→「カディスの赤い星」へ。
- ④⑲海外を舞台にした冒険小説をさらに読んでみたいと思った人は→舟戸与一「山猫の夏」へ。

## 九月 比較文化論

- ④①「風土」☆ 和辻哲郎 (岩波文庫)
- ④②「中国人と日本人」 邱 永漢 (中央公論社)
- ④③「アングロサクソンと日本人」  
渡部昇一 (新潮選書)
- ④④「日本人とユダヤ人」  
イザヤ・ペンダサン (角川文庫)
- ④⑤「わさびと唐辛子」 呉 善花 (祥伝社)
- ④⑥「二つの大聖堂のある町」  
高橋哲雄 (ちくま学芸文庫)
- ④⑦「和をもって日本となす」  
ロバート・ホワイティング (角川文庫)
- ④⑧「ライシャワーの見た日本」  
E・O・ライシャワー (徳間文庫)
- ④⑨「どの宗教が役にたつか」  
ひろさちや (新潮選書)
- ④⑩「蕎麦ときしめん」 清水義範 (講談社文庫)

## 十月 ミステリー

- ⑤①「そして誰もいなくなった」  
A・クリスティ (ハヤカワ文庫)
- ⑤②「レーン最後の事件」  
E・クイーン (創元推理文庫)
- ⑤③「ドーヴァー4／切断」  
J・ポーター (ハヤカワ文庫)
- ⑤④「二人の妻をもつ男」  
P・クエンティン (創元推理文庫)
- ⑤⑤「砂の器」 松本清張 (新潮文庫)
- ⑤⑥「乱れからくり」 泡坂妻男 (創元推理文庫)
- ⑤⑦「戻り川心中」 連城三紀彦 (講談社文庫)
- ⑤⑧「北斎殺人事件」 高橋克彦 (講談社文庫)
- ⑤⑨「火車」☆ 宮部みゆき (新潮文庫)
- ⑤⑩「アリスの国の殺人」 辻 真先 (大和書房)
- ⑤⑪マザーグースをモチーフにしたミステリーをさらに読んでみたいと思った人は→クイーン「生者と

死者と」へ。

⑤② 純粋なロジックで構築されたミステリーをさらに読みたいと思った人は→「Xの悲劇」, 「Yの悲劇」, ハリィ・ケメルマン「九マイルは遠すぎる」へ。

⑤② クイーン後期の円熟味を味わいたいという人は→「災厄の町」へ。

⑤⑥ ご当地ものの(金沢を舞台にした)ミステリーをさらに読んでみたいと思った人は→宮部みゆき「スナーク狩り」へ。

⑤⑥ 泡坂妻男の作品をさらに読んでみたいという人は→「湖底のまつり」, 「曾我佳城全集」へ。

⑤⑥ 奇術の世界に興味を持った人は→松田道弘「トリック物語」へ。

⑤⑦ 連城三紀彦をさらに読みたいという人は→「変調二人羽織」へ。

⑤⑧ 浮世絵ミステリをさらに読んでみたいという人は→「写楽殺人事件」へ。

⑥⑩ 推理作家協会賞受賞作品をさらに読んでみたいと言う人は→陳舜臣「玉嶺よ再び」, 天藤真「大誘拐」, 京極夏彦「魍魎の匣」へ。

## 十一月 SF・科学

⑥① 「アルジャーノンに花束を」☆

D・キース (早川書房)

⑥② 「幼年期の終わり」

A・C・クラーク (ハヤカワ文庫)

⑥③ 「夏への扉」

R・ハインライン (ハヤカワ文庫)

⑥④ 「盗まれた町」 J・フィニィ (ハヤカワ文庫)

⑥⑤ 「吉里吉里人」 井上ひさし (新潮文庫)

⑥⑥ 「クロスファイア」 宮部みゆき (光文社)

⑥⑦ 「リング」「らせん」「ループ」

鈴木光司 (角川書店)

⑥⑧ 「コスモス」 C・セーガン (朝日文庫)

⑥⑨ 「奇妙な論理」 M・ガードナー (教養文庫)

⑦⑩ 「脳の中の幽霊」

V・S・ラマチャンドラン (角川書房)

⑥⑨ オルゴン理論に興味を持った人は→「ライヒ」へ。

⑥⑨ この手の似非科学を徹底的におちょくりまくった本を読んで大笑いしたいという人は→「トンデモ本の世界」, 「トンデモさんの大逆襲」へ。

## 十二月 歴史について

⑦① 「西洋の没落」

O・シュペングラー (五月書房)

⑦② 「大国の興亡」 P・ケネディ (草思社)

⑦③ 「文明が衰亡する時」 高坂正堯 (新潮選書)

⑦④ 「歴史の終わり」

フランシス・フクヤマ (知的生き方文庫)

⑦⑤ 「シンドラーのリスト」☆

T・キニーリー (新潮文庫)

⑦⑥ 「ローマ人の物語Ⅱ」 塩野七生 (新潮社)

⑦⑦ 「国盗り物語」 司馬遼太郎 (新潮文庫)

⑦⑧ 「明治という国家」

司馬遼太郎 (NHKブックス)

⑦⑨ 「落日燃ゆ」 城山三郎 (新潮文庫)

⑧⑩ 「失敗の教訓 日本軍の組織論的研究」

(中公文庫)

⑦⑫ ポール・ケネディの著作をさらに読みたいと思った人は→「二十世紀の難問に備えて」へ。

⑦⑮ ナチズムとホロコーストに興味を持った人は→フランクフル「夜と霧」, フレデリック・フォーサイス「オデッサファイル」, ハインツ・ヘーネ「SSの歴史」へ。

## 一月 ノンフィクション

⑧① 「栄光なき天才たち」

伊藤智義 森田信吾 (集英社)

⑧② 「収容所から来た遺書」

- ⑧ 辺見じゅん (文春文庫)
- ③ 「ビートルズになれなかった男」  
高尾栄司 (光文社文庫)
- ④ 「24人のビリーミリガン」  
D・キース (早川書房)
- ⑤ 「戦後欲望史」 赤塚行雄 (講談社文庫)
- ⑥ 「もの喰う人々」 辺見 庸 (角川文庫)
- ⑦ 「2039年の真実」 落合信彦 (集英社文庫)
- ⑧ 「放浪の天才数学者エルデシュ」  
ポール・ホフマン (草思社)
- ⑨ 「死体は語る」 上野正彦 (角川文庫)
- ⑩ 「宇宙からの帰還」 ☆ 立花隆 (中公文庫)
- ⑧ 数学の歴史に興味を持った人は→サイモン・シン  
「フェルマーの最終定理」へ。
- ⑧ 数奇な人生を送った天才数学者の物語をさらに読  
みたいという人は→藤原正彦「心は孤独な数学者」  
へ。
- ⑩ 立花隆のノンフィクションをさらに読みたいとい  
う人は→「臨死体験」へ。

## 二月 その他

- ① 「ジョニーは戦場へ行った」 ☆  
D・トランゴ (角川文庫)
- ② 「動物農場」 G・オーウェル (角川文庫)
- ③ 「今夜、すべてのバーで」  
中島らも (講談社文庫)
- ④ 「ものぐさ精神分析」 岸田 秀 (中公文庫)
- ⑤ 「コミュニケーション不全症候群」  
中島 梓 (ちくま文庫)
- ⑥ 「復興期の精神」  
花田清輝 (講談社学術文庫)
- ⑦ 「自分を知るための哲学入門」  
竹田青嗣 (ちくま学芸文庫)
- ⑧ 「三人姉妹」 A・チャーホフ (新潮文庫)
- ⑨ 「夏の闇」 開高 健 (新潮文庫)

- ⑩ 「天風先生座談」 宇野千代 (廣済堂文庫)
- ⑨ 戦争の愚かしさに改めて思いを至らせた人は→江  
戸川乱歩「芋虫」、野坂昭如「火垂るの墓」へ。
- ⑦ この機会に現代思想を勉強してみたいと思っ  
た人は→「現代思想の冒険」、「現代思想入門」へ。
- ④ 岸田秀、竹田青嗣の対談を読みたいと思っ  
た人は→「物語論批判」へ。
- ④ これをきっかけに心理学をちょっと勉強してみ  
たいと思っただ人は→「フロイト」、「フロイトを読  
む」、「フロイトかユングか」へ。
- ④ 実際にフロイトを読みたいと思っただ人は→  
「精神分析入門」へ。
- ⑧ さらにチャーホフを読みたいという人は→「ワー  
ニャおじさん」へ。

## 今月のベストテン番外編 (映画・ビデオ)

- (1) 「生きる」 黒沢 明
- (2) 「シンドラーのリスト」 S・スピルバーグ
- (3) 「砂の器」 野村芳太郎
- (4) 「ニューシネマパラダイス」 G・トルナトーレ
- (5) 「さびしんぼう」 大林宣彦
- (6) 「カリオストロの城」 宮崎 駿
- (7) 「さらば我が愛 霸王別姫」 陳凱歌
- (8) 「怒りを我らに」
- (9) 未来潮流「フラクタル」
- (10) 「プロジェクトX」
- (2) 「シンドラーのリスト」を読んで映画も是非とも  
読みたいと思っただ人に。
- (3) 「砂の器」を読んで面白いと思っただ人に。
- (7) 「ワイルドスワン」を読んで中国現代史によりいっ  
そう興味を持った人に。
- (9) 「放浪の天才数学者エルデシュ」を読んで数学の  
世界の面白さに惹きつけられた人に。

教員というのは、ある意味で様々な「知的世界への水先案内人」だと私は思っているが、教員から生徒への単なる一方通行というのではやはり面白くない。また、教員からの働きかけよりも、友人どうし相互の影響の与えあいの方が時に遥かに大きな意味を持つ世代である。私自身、高校時代、友達が薦めてくれるので、友達が読んでいたので、というのが一つの読書の動機づけになったことが少なくなかった。そういうことで、別の試みも行ってみることにした。各自に「読書推薦文」というものを書いて提出させ、それを冊子にまとめて配布するというところを行ってみた。しかし、これはいわゆる「読書感想文」という類のものでは決してない。自分自身にも経験があるからよくわかるのだが、こういうものはよい「読書感想文」というものはこういうふうには書かれねばならないという形式性に縛られて、書き出す前に凍んでしまうということがありがちである。そしてその本の解説の丸写しに堕してしまうことが起こりがちになるのである。これでは意味がない。けれども良書に出会った時、人はそれを人に薦めたいという想いに駆られものである。そうした想いを体裁にこだわることなく素直に文章化してもらえばいいのではないか。私はそう思った。そうした想いが「読書感想文」ならぬ「読書推薦文」という形式に私を至らしめたという部分が少なくない。生徒自身も、かなり「読書感想文」以上に肩の力を抜いていろいろ書いてくれたように思う。以下にそうした読書推薦文のいくつかを抜粋してみた。

フロイトを読む 岸田 秀（青土社）

物事を深く、多元的にみつめられるようになる。するとそれまで理解できなかったものが理解できるようになったり、許し難い気持ちを捨てきれなかったものを許容できるようになったりする。こういう体験をする機会は、そう多くはない。ただ、好運に

も、良書に巡り会えた場合には、すんなりと体験できるのである。

「心理学」という言葉は、誰でも知っていると思うが、それが実際どういうものなのか、理解している人はあまりいないのではないだろうか。私は、岸田秀の「フロイトを読む」を読んで、「心理学」の世界に一步踏みこむことができたように思う。それは、私にとって、全く新しい世界だった。こんなものの見方があるのか、と感心することしきりであった。この本によって、私は、「物事をより深く多元的に」見ることができるようになった。まだまだ知識は足りないが、一応、心理学的見地から物事をとらえることが可能になった、というわけである。

この本には、作者岸田秀が懸命に行った自己分析のことや、心理学の視点に基づいた説明が、作者自身の生い立ちと絡めて、綴られている。わかりやすく、読みやすいので、これは、心理学入門に最適の一冊と呼ぶにふさわしい本であると思う。また、心理学になじみのないひとには、きっと新しい世界を開いてくれるだろう。

「アルジャーノンに花束を」

ダニエル・キイス（早川書房）

この作品は、32歳になっても幼児の知能しかない主人公、チャーリー・ゴードンが手術によって天才となる過程をえがいたものだが、同じ手術を事前に受けたネズミのアルジャーノンが驚異的な知能を得たのち、やはり急速なスピードで知能を失うのを見てチャーリーが自分の行く末を知るという物語である。

チャーリーの知能の増大に伴い、彼にとっての世界が全くの異世界に変貌していくのが手にとるように分かる。周りの人々はかつて彼が信じていたような素晴らしい人間ばかりではないという事に気付いてしまう苦しみ描写されている。白痴のチャーリー



イがその望み通り知能を増進させて戻ってきたとき、人々は冷ややかな目で彼を迎えるのだ。新しい世界は何も知らなかった以前の状態より決して良いとは言えないものだったのではないか。そしてチャーリーの心には自分が常に実験動物としてみられ、人間として扱われないことへの反発が芽生えていったのだろう。彼自身も以前の純粋さを失い、傲慢で自己中心的な人物になっていった。そのため、周りの人々も彼を敬遠するようになっていくのだが、その中でアルジャーノンとの奇妙な友情が育まれていったのも分かる気がする。彼のような特殊な立場にいるものは誰一人としていなかった。一体誰が彼を本当に理解してあげることができたのだろうか。非常に高い知能をもってしまった彼に対して羨望というよりも哀れみを強く感じた。

その後、チャーリーの知能はアルジャーノンと同様、急速に失われていくが、同時に彼は優しい気持ちをもったもとの自分自身を取り戻していく。人間にとって本当に大切なものは何なのかを深く考えさせられた。人間的な愛情による裏打ちのない知識や教育など何の意味もないということを教えてくれる作品である。

「悲しみよこんにちは」 サガン 新潮文庫

「悲しみよこんにちは」はサガンの処女作である。作者はたった十八歳でこの作品を書いたというから驚いてしまう。

本の主人公はやもめの父と一緒に暮らす十八歳の少女セシル。突然父の前に知的で上品な女性が現れ、二人はすぐに結婚を取り決める。最初のうちセシルはこの女性を尊敬しあこがれていたが、試験勉強を強制されたり恋人と逢うことを許してくれない彼女を疎ましく思い次第に憎悪の念を抱くようになる。そしてセシルは自分の恋人と父の愛人であった若い女の子を使って父の結婚を妨害しようとする…。

父の愛を独占したいという思い、完璧・完全なものへの反発心、そして青春期の揺れる心。彼女自身も青春期にいるからなのだろうか、サガンはこの青春期特有の残酷さを鋭い眼で新鮮にとらえ、美しく独特な雰囲気を持つ文章で書き上げている。

実をいうと私は三年前にも一度この本を読んでいた。その時私はこの作品をつまらない本と思った。一応読み通しはしたが、読んでいる途中で嫌気がさしてきた。ところが改めて読みなおしてみるとこれがとても面白い。未知なものへの好奇心、自分の快適な生活を何としてでも守ろうとする思い、そして自分でもどうすればいいのか分からないのに周囲に流されていくとまどい、そういった微妙な心理が精密に描かれているのだ。読んでいるうちにいつの間にか私は自分がセシルであるかのような錯覚に陥ってしまう。どうしてこんなにこの作品にひかれ共感を覚えるのか。思うにそれは私自身も青春期にいるからであろう。自分が青春期にあるからこそ主人公の、つまり作者の心が切実に伝わってくるのだ。この「悲しみよこんにちは」を是非ともみんなに読んでもらいたい。青春期の微妙な心を素直に感じ取れる今のうちに。

最後に、一年間の「朝の10分間読書」を終え、53回生対象に読書アンケートを行ってみた、その結果をまとめておく。

#### ☆ 今月のベストテンへの感想

- 生徒一人一人のベストテンってしたら面白かったかも。
- 本に対する興味が以前よりも増した。持つだけだったのが、本棚に置いてくださるおかげで、手にとってパラパラ読もうかという気にまでさせるので私にはとてもよかった。
- 戯曲系もやってはどうでしょう。

- 先生がその場で販売してください。
- もうどんどんやってください。好きな作家でベスト3を考えるってのはどうでしょうか。うちの親も結構あの小さな紙を参考にしているようです。
- 興味深い本が紹介されるのを楽しみにしていた。
- ベストテンだけではなく10位圏外の紹介や、裏ベストテン（面白いがひねってあって一般受けしないものなど）があると面白いと思う。
- 漫画もやってほしい。
- 次に読む本の参考になる。
- もっとどこの本屋でも売っている本にしてほしい。
- ベストテンと言わず20も30も紹介してほしい。
- もっと時間をかけてほしい。「ドラマシリーズ」もつくってほしい。
- 一人一人に印刷して配るより壁などに貼った方が効果的だと思う。
- 自分でどんな本をよんだらいいかわからないので、推薦してくれて本を読もうという気になるのでとてもいいです。
- ベストテンはいいと思うけど、ジャンル別にしてしまうと、自分の嫌いなジャンルの時に、本を借りない。（純文学とか）
- 写真集とか画集とか詩集とかを紹介してみるのもなかなかいいのでは？
- 先生の読んでいる本の量に驚きました。僕も暇な時は読書するようにします。
- どうせならベストハンドレッドくらいにしてほしい。

☆ 好きな作家

司馬遼太郎	18票
宮部みゆき	12票
村上 春樹	6票
灰谷健次郎	5票
田中 芳樹	4票

吉本ばなな 4票

以下3票

スティーブン・キング 三島由紀夫 宮城谷昌光  
京極夏彦 星 新一 ヘッセ

以下2票

山崎豊子 浅田次郎 高村 薫 モンゴメリ  
夏目漱石 向田邦子 清水義範  
ダニエル・キース 中島らも 遠藤周作  
アガサ・クリスティ 筒井康隆 原田宗典  
シドニー・シェルダン 村上 龍 鈴木光司  
柳 美里 辻 仁成 五木寛之 塩野七生

☆ この一年間に読んだ本で面白かった本、印象に残った本

ハリーポッターシリーズ	9票
項羽と劉邦	7票
ワイルドスワン	6票
バトルロワイヤル	5票

以下4票

24人のビリーミリガン 永遠の仔 もの喰う人々  
アルジャーノンに花束を そして誰もいなくなった  
海と毒薬 絡新婦の理

以下3票

リング・らせん・ループ 梟の城 停電の夜に  
命 だからあなたも生きぬいて ガロア理論  
国盗り物語 姑獲女の夏

以下2票

大地の子 ホワイトアウト JOJOAGOGO  
死体は語る 四十一番目の少年 イグナシオ  
火車 弟切草 五体不満足 東大オタク学講座  
ノルウェーの森 こころ レベル7 砂の女  
ストロベリーロード すべてがFになる 枕草子  
つぐみ リヴィエラを撃て 蒼穹の昴 鉄鼠の檻  
狂骨の夢 魍魎の匣 塗仏の宴

書店で平積みになっているベストセラーがかなり名を連ねることになるとはある程度予想していたが、映画化、テレビドラマ化された作品の原作本が予想以上に顔を並べることとなり、映像メディアの影響の強さをうかがわせる結果となった。「不易」「流行」という言葉があるが、この手の「面白かった本」には、ずっと読み継がれていくことになる古典的作品と、ただ一時期のブームで消え去っていく本との二種類があるように思われる。何が前者で、何が後者が見定めるためにも、高校生を対象にしたこのような定点観測はこの後も続けていく必要があると強く感じた。